

# 日本も元気にする青年海外協力隊 三重県

ここにはインタビューの一部のみが掲載されています。全文は以下のURLで公開しています。

URL >>> <https://www.jica.go.jp/chubu/enterprise/volunteer/index.html>

## >>> Interview 01



### 現地で生活し身に付けた「人との付き合い方」は今も活かされている。

アサテ環境研究所 代表 竹尾 敬三 さん (三重県名張市在住)

赴任先はケニアの西の田舎町ホマベイでした。県の農業事務所勤務となりました。家はアメリカンビースコー(アメリカの協力隊で日本の手本となった組織)の2人と3人で同居でした。よく言えばシェアハウスのはしりです。赴任当初は言葉と生活との戦いで、生きていくのに精一杯の日々でしたが、慣れてくると事務所の友人と夜は飲みに行くようになり、気が付けば英会話に不便を感じなくなっていました。半年ほど経っていました。事務所の仕事は稲作普及と言うことで、後は自分で考えるということでした。どこで何をどのように進めれば良いのか?で一部で稲作を行っているところを見つけてそこで普及活動を主体に進めました。多くの人の助けにより、思っていたより順調に進みました。現地で3年間生活したことにより、人と接するとき、国や宗教の違いは関係なくなりました。おかげで、現在東南アジアの国々に出張してもほとんど困ることはありません。



派遣国 ケニア(稲作)  
派遣期間 1978.02~1981.02

## >>> Interview 02



### 外国人であることを経験したことが今の業務に役立っている。

(公財)三重県国際交流財団 筒井 美幸 さん (三重県四日市市在住)

初めての海外生活で、私にとっては全てが「異文化」でした。最初のころは新鮮さもあり「違い」を「理解する」よう努めていたと思いますが、次第にそれが日常となると「なん?」「どうして?」という感情がわいてきたことを覚えています。これが、異文化の中でたどるプロセスの一端であることは後で知りました。幼児教育という分野が確立されていない中、また私自身の言語力が伴わない中、よりよい保育のためにいろいろなことをやりましたが、現地にも習慣があり、いきなり日本から来た人に偉そうに言われたくない!という厳しい視線を感じながら活動でした。一つひとつ、理解を積み重ねていくには時間がかかることも実感しました。このような経験は、現在の勤務先での様々な業務に役立っていると感じています。三重県には多くの外国人が暮らしていますが、私自身が外国人であることを経験したことで、彼らのおかれている状況をより理解できるようになった気がします。

派遣国 ドミニカ共和国(幼稚園教師)  
派遣期間 1992.04~1995.04

## >>> Interview 03



### フィリピンでの生活で気づいたお金より大切なもの。

特定非営利活動法人 大杉谷自然学校 大西 かおり さん

私がフィリピンで活動していた20年前には、フィリピンにはお金より大切なものがたくさんありました。例えば家族の絆や地域の助け合い、自然から恵みを得る生活などです。そこには貧しいけれど笑顔が輝く人々の姿があり、どこか懐かしい気持ちがあったものです。ある意味日本の中の「開発途上国」とも言える地域社会にも都市にはない素晴らしいものがたくさん残っています。自然から恵みを得ていた世代の心を引き継いでいる人々、地域に残る神様に自然に手を合わせてしまう人々、「ネイティブ・ジャパニーズ」とも呼ばれる素晴らしい人々が地域には今も住んでいます。ですが、残念なことには日本の地域社会は急速に多くのものを失いつつあります。多くの方に日本の地域社会を訪ねてみて欲しいと思っています。



派遣国 フィリピン(理科数科教師)  
派遣期間 1995.12~1998.09

## >>> Interview 04



### 開発途上国の現場で働く楽しさを実感するとともに実力不足であることも痛感。その後の人生を決めるきっかけに。

三重大学大学院生物資源学研究所准教授 関谷 信人 さん (三重県津市在住)

青年海外協力隊員(食用作物)としてザンビアへ赴任した際、農業協力や農村開発の現場で働く楽しさを実感し、何とかその世界で生きていこうと考えるようになりました。一方で、開発途上国の農業現場で活躍するには実力不足であることも痛感しました。また、国連機関や国際研究所では、何よりも肩書が重視され、博士号なしにはプロジェクトに加入することもできない現実を目の当たりにしました。こうした状況で、他の仕事にあまり魅力を感じていなかったこともあり、迷わず博士課程に進学することを決めました。進学後、今度は研究の楽しさに自覚がてまい、研究課題をもっと突き詰めていきたいと考えるようになりました。そこで、博士号を取得した後も国際協力の現場へ戻らず、しばらくボスドク(博士研究員)として研究を継続することになりました。

派遣国 ザンビア(食用作物)  
派遣期間 1997.12~2000.01

派遣国 タンザニア(食用作物・稲作)  
派遣期間 2008.01~2008.09

## >>> Interview 05



派遣国 インドネシア(柔道)  
派遣期間 1999.07~2001.06

派遣国 チリ(柔道)  
派遣期間 2002.07~2004.07



### 子どもたちが社会を生き抜いていく力を協力隊の経験を通して伝えていきたい。

三重県多気郡明和町立明和中学校 中谷 有二 さん

少子高齢化や社会的、経済的にグローバル化が進むなど変化の激しい現在の日本において、子どもたちが社会を生き抜いていく力を私たち教師が育んでいかなければなりません。外国籍の生徒が多数在籍している学校も多く、多文化共生や異文化理解等、私自身が協力隊として経験させてもらったことを子どもたちに伝えることは、教師として重要な役割の一つでもあります。海外で生活するため、言葉や文化の違い、どのように対応してきたのか、私自身、現地で理解し受け入れてもらうために苦勞し、努力してきたこと等、私たち自身が厳しい日本社会で生き抜いていくために全て必要なことばかりでした。忍耐力、思考や判断力、コミュニケーション能力、諦めないことや、課題を解決していく力等、協力隊に参加させていただいて、現地で学んだこと全てが活かされているからこそ今の私があります。

## >>> Interview 06



### ブラジル文化に浸ってすごしたことがキャリア形成の大きな礎となり、強みに。

日系社会青年ボランティア/四日市市立笹川西小学校 藤川 純子 さん (三重県四日市市在住)

当時から、帰国後も日本の教育現場でブラジルでの経験を生かしたいという願いを強く持っていたため、教育委員会に頼み込んで、現地の中・高等学校に聴講生として通わせてもらった。ポルトガル語を猛勉強し、隣町の私立大学(教育心理学科)に合格するまでに至った。2年間ボランティアとして日系社会に何か貢献し遺せたいというよりは、一人の若い人間として日系移民の歴史や現実をよく知るチャンスを、ブラジルという多民族でおおらかな文化に浸って生き生きと過ごせたことこそが、今の自分のキャリアを形成する大きな礎となっている。ブラジル人の児童が多く在籍する小学校で勤務している現在、通訳のみならず、様々な場面で彼らの母語・母文化をよく知っていることが、大きな強みになっていると感じている。



派遣国 ブラジル(日本語教師)  
派遣期間 2000.03~2002.03

## >>> Interview 07



派遣国 グアテマラ(環境教育)  
派遣期間 2007.03~2009.03

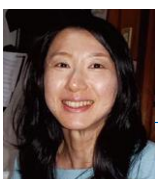


### 協力隊の経験から、「人との繋がり」を意識するように。

古書からすり 中田 茂美 さん (三重県名張市在住)

協力隊では、学校に行って環境教育の授業を行ったりしていました。これは必須授業というのではなく、先生の裁量で実施されるものだったので、授業時間の確保の交渉から、行くための手段等々、人の助けを借りないといけないばかりでした。また生活においても日本のようにいかないことも多く、同様でした。そういった経験から思いもかけない親切を受けたり、親しくなったりと人との繋がりを深くすることになったのではないかと思います。もちろん、何をやるのも時間が掛かってしまう欠点がありますが…今の仕事や暮らしを人との繋がりを楽しみながらやっていけるのもこの経験があるからかなと思っています。

## >>> Interview 08



### ガーナで触れた人々のたくましさに、今でも励まされています。

伊藤 妙 さん (三重県四日市市在住)

HIV/AIDS感染者は差別により離婚、村八分、失業などで今までの人生を奪われ、感染者と知られるのを何よりも恐れられるように生きていました。それが「しおり作りで得た収入を元手に、好きな仕事をもう一度始めたい」と夢を誓ったのです。定規の使い方も知らなかった彼女たちがマスターするのは大変でした。でも初めての収入で、孫の子供服を買ったと嬉しそうに見せてくれた笑顔は本当に輝いていました。帰国後3ヶ月はとして、「しおり」によって中心メンバー2人が以前やっていた仕事を始めたことと報告がありました。日本でもガーナでも悲運が降りかかった時、生きることが辛いものです。その与えられた状況を嘆くより、どう受け止め対処するか、彼女たちのたくましさに私は今でも励まされています。



派遣国 ガーナ(エイズ対策)  
派遣期間 2007.03~2009.03

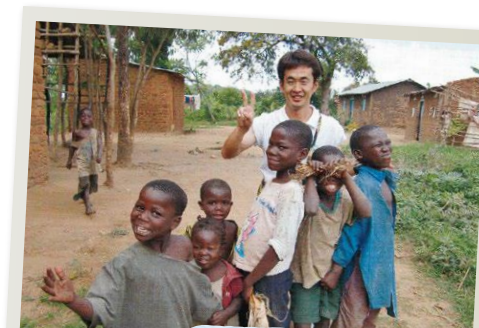
## >>> Interview 09



### ウガンダで経験したすべての事が今の人生に影響を与えている。

医療法人如水会 鈴鹿腎クリニック 藤川 兼一 さん (三重県鈴鹿市在住)

ウガンダでの2年間は、今までの人生では経験できない本当に色々な体験をさせて頂き、自分の方が「学ばせ・教えられる」日々でした。大げさに聞こえるかもしれませんが、「経験した全ての事が、今の仕事や人生に役立つ・影響を与えている」と感じています。例えば、「無いなら無いにある物でやってみよう」、「物が無いならアイデアを出そう」、「このやり方がダメなら、次はこのやり方でやってみよう」など、色々な角度から物事を考えられるようになりました。さらに、「電気がある・水道から安全な水が出る・働いて給料が頂ける・病気や怪我しても適切な治療や投薬を受けられる」など日本にいたら当たり前なことでも「本当にありがたい事なのだ」と考えられる様になり、「あたり前に迎えられる毎日」に感謝するようになった。事も人生に影響を与えた事です。そして、ウガンダの広大な大地を見た「この広大な大地からは、悩みなんでっばけな事だな!」と考えられる様になった事ですかね(笑)



派遣国 ウガンダ(医療機器)  
派遣期間 2010.01~2012.02

## >>> Interview 10



派遣国 キルギス(村落開発普及員)  
派遣期間 2011.01~2013.01



### 現地で暮らし、現地の人々と接することで、人生について考えるきっかけに。

羊毛雑貨 チェベル 南出 幸子 さん (三重県伊賀市在住)

草の根で地域に入って活動したことで、自国以外の文化、価値観、特性、そして人々を知ることができました。悔しいことも、悲しいことがあった時も、他者を知り受け入れ、自己を見つめ直すことで対処することができました。現地の人々と同じ視点に立ち、考えることができた時に、受け入れられることが多く、順応性や多様性が培われたと思います。そういった中で、人と触れあうこと、相互理解の大切さを感じました。また、今あることへの「感謝」と「足るを知る」ことを改めて学ばせてもらいました。現地の人々の暮らし、考え方、家族・友人を大切にしている思いに接するうちに、人生の「優先順位」を考えるようになりました。これらの出会い・経験が、その後の人生の選択に繋がっていると思います。

## >>> Interview 11



### ガボンでの日々の暮らしから人間の力強さ、やさしさを知った。

農家 瀬古 敏彰 さん (三重県伊賀市在住)

平日は田舎の農家に泊ってもらい、寝食をともにさせてもらっ。お金は無くとも、よく笑う。テレビは無くとも、娯楽をつくる。学校は無くとも、生きる知恵であふれている。祖先を敬い、自然を畏怖し、家族の幸せを願う…。感情丸出しのぶつかり合いには、これまであまり鍛えてこなかった筋力を要した。人間はかくも面白く、図太く、やさしく生きられるのだと教えてもらった。仕事でつまづいたとき、偏狭な考えに陥りそうなき、ガボンでの日々を思い出すと、視界が開ける思いがする。



派遣国 ガボン(村落開発普及員)  
派遣期間 2011.03~2013.06

## >>> Interview 12



派遣国 キルギス(青少年活動)  
派遣期間 2011.06~2013.03



### 臨機応変に対応する力、忍耐力、多様な価値観、社会で生き抜くための必要な力が鍛えられた。

三重大学教育学部附属中学校教諭 中垣 尚子 さん (三重県鈴鹿市出身)

キルギスは日本とは違い、予定通りに進まないことや、約束が守られないことがありました。でも、だからこそ鍛えられた力があります。臨機応変に対応する力です。そして、忍耐力もつきました。これからの社会の変化に対応していくには必要な力のように感じます。さらに現地で待たばうけをすることも多く、正直、とてもイライラしましたが、それは自分だけでした。その場の状況を受け入れて、過ごすということ学びました。こういった経験を通して、物事に対して寛容になれた気がします。人それぞれ、価値観や優先順位が違うことを改めて感じるとともに、自分の当たり前が当たり前ではないことも改めて痛感しました。キルギスでは「クタイプルス(神のみぞ知る)」という言葉があります。先のことばからないということです。今の自分の気持ち大切に、今、目の前の人、物事を大切に生きていくのだと思います。先のことばかり考えず、今にフォーカスする生き方の大切さも学びました。